

「私の」庭巡りの楽しみ

昭39年 法 永坂 和也

塾生の頃から庭を観て歩くのが好きで、以来、神社仏閣の庭はもとより公園や、旅館やホテル、料亭等（これは余り縁がありませんでしたが）の庭園に随分接してきました。

ここに“「私の」庭巡りの楽しみ”を記したのは、大それた「庭園ガイド」や、ましてや「庭の見どころ」などを紹介しようとするものではありません。

庭巡りの好事家が北海道から沖縄までの全国に数多ある名庭園を足の向くまま、気の向くままに巡り歩いて得た印象を語り、「私」の庭巡りの楽しみを述べたのに過ぎません。

今年も、年明け早々に真冬の庭巡りに和歌山、岸和田、堺、高槻、京都を訪ねました。

和歌山では、和歌山城の西の丸庭園、通称「紅葉溪庭園」^{もみじたに}と紀州十代藩主徳川治宝公^{はるとみ}が隠居所の清遊の場として造営した「養翠園」を観て、岸和田市では、岸和田城の天守閣前に現代の著名な作庭家・重森三玲^{みれい}によって昭和28年に設計、作庭された「八陣の庭」を観てきました。

その後、堺市では千利休とその一門やその師武野紹鷗^{たけのじょうおう}の供養塔もある利休縁^{ゆかり}の南宗寺の枯山水の庭や、仁徳御陵の前に広がる大仙公園にある現代の造園家・中根金作（島根県にある足立美術館の庭の設計者として有名）が作庭した日本庭園を観たり、高槻市にある普門寺の池泉式枯山水庭園の「観音補陀落山」の庭を観て、京都から帰京前のひとときを東本願寺の涉成園を訪ね静かな時を過してきました。



「八陣の庭」

私の庭巡りの楽しみは、度たび同じ庭を訪ねているのに、季節を変え、時間を変えて観るといつも初めて訪ねる全く新しい庭のように観えることだと思います。

例えば、夏には灯籠の傍らに植栽されている青々とした灯障り^{ほざわり}のもみじが、秋には真っ赤に紅葉したもみじの葉がひらりと一枚、灯籠の傘の上に懸かっているだけでも、もう別の景色に観えることは新しい風情の発見です。

その場合でも、春日灯籠の傘に懸かっていたのでは全く面白くありません。やはり蓮華寺灯籠とか織部灯籠の傘の上にひらりと赤でも黄色でも一枚のもみじの葉が懸かっているこそ季節の移ろいが感じられるのです。

季節が違えば庭の景色も変わり、同じ月に訪ねても日にちが異なれば植栽されている樹木の表情も違います。

同じ庭に植栽された樹木でも、芽吹き時の柔らかい黄緑の色や、

真夏には深緑の真っ盛りの色であったり、鮮やかな紅葉の色だ

ったり、裸木になった落葉樹の清々しさが見られたりとその時、その時の庭が楽しめます。これまで、北海道から沖縄までにある国指定の特別名勝・名勝庭園に指定されている庭園（平成19年1月現在186件）を中心に、余り知られていない庭も含めて数々の庭園を巡り歩いてきました。

因みに、私が春夏秋冬、再三再四参観させて頂いている桂離宮、修学院離宮、仙洞御所や京都御所は皇室財産の故か名勝や重要文化財等の指定は受けていません。

また、旅館やホテルや料亭などの全くの民間の庭園は、どんなに素晴らしい庭園でも国指定の名勝庭園には指定されていません。

例えば、十五代将軍徳川慶喜公が20年余りを過した浮月楼

（静岡市）の庭園も大名庭園らしい武張った良い庭で当然名

勝庭園に指定されていてもおかしくありませんが、今は料亭

として営業しているためか国からの名勝庭園の指定を受けていません。

当然ながら、国が無償でそこを宣伝してしまうことになってしまうからだと思います。

日本庭園は、西欧の整形式庭園（建築式）とは異なり自然風景式庭園（風景式）という様式に属します。自然風景式庭園にはイギリス発祥のものもあるが、日本庭園の場合は生きている自然の風景をお手本にして庭園構成の主役としています。

日本庭園は、左右非対称、曲線を作庭の旨としているのに対して西欧の庭園は、左右対称、直線を基本としています。

西欧庭園の視点は多くの場合、建物（宮殿）の中から俯瞰して眺めるのに対して、日本庭園の場合は庭の中に溶け込んで、あるいは歩きながら、あるいは座して眺める違いがあるように思います。



「宝厳院(京都)の灯籠」



「一升石の州浜(仙洞御所)」

西欧は自然と闘い、自然を制圧してきたのに対して、日本は自然を敬い、自然と和して生きてきた歴史的な違いにあるのではないかと思います。

ヴェルサイユ宮殿やミラベル宮殿（ザルツブルグ）やニンフェンブルク宮殿（ミュンヘン）の庭園を観ても、私は全く感動しません。

もっとも、ウイーン 19 区にある「世田谷庭園」（世田谷区寄贈）やホランドパーク（ロンドン）の「京都庭園」やインターラーケンの「友好の庭」

（大津市寄贈）やシェーンブルン宮殿（ウイーン）の

「日本庭園」等の海外にある日本庭園を観てもどうも

馴染めません。いずれも日本の庭師が作庭したか、文献

を基に現地の庭師が作庭したと思われませんが、作庭以来、

日本庭園らしい手入れがされていないということも響いて



「シェーンブルン宮殿の日本庭園」

いるのかもしれませんが、ごく一部にでも日本にはない樹木が植栽されていたり、日本では見られない石が使われていたりで馴染めないのかもしれませんが。

その点、国内の日本庭園を観ているといつも穏かな気持ちになり心が落ち着くのは不思議なものです。日本庭園に浸っていると「侘び」や「寂び」が感得されるからではないかと思いますし、私は逆に「侘び」や「寂び」が偲ばれない庭は日本庭園とは言えないのではないかと考えています。

同様に各国の西洋庭園にも、その国の人が観れば同じ感想を抱くのではないかと思います。

例えば、日本にあるいわゆるイングリッシュガーデンもイギリス人が観れば、よく似せてはあるが何となく本国にある庭園とは異なるという違和感を覚えるのではないかと思います。

日本庭園を、私はいつも四つの視点から眺めては楽しんでいます。

特に「水」と「石」と「植栽（樹木）」と「景物」に目を注いで眺めています。

「水」は、必ずしも水がある池だけではなく水が涸れてしまいそれが却って風景を作っている

「涸れ池」もあれば、初めから水を入れることを想定せずあたかも水が流れている様を思い描

くように作庭されている枯山水の「枯れ池」もあります。

「水」には動かない池の水もあれば、滝として動的な使われ方もあれば、遣水のような流れもあります。

「石」は、三尊石のような組み石や鯉魚石を始め、さりげなく据えられている庭石の佇まいも、何故そこに置かれているのかを想像しながら観るのが楽しいのです。

石は単独で据えられることもあるし、多くの場合はいくつかを組み合わせることで表現されるが、複数の石を組み合わせることを「石組」と言います。

「石」ほど種類の多いものはありませんし、当然のことながら一つとして同じものはありません。よく知られているものを挙げてみても鞍馬石から、緑泥片岩（徳島県・和歌山県特産）、結晶片岩（青石）、賀茂の真黒石、白川石、御影石と挙げればきりがありません。石には、その種類ばかりではなく同じものがないことから、もっともらしい名前の付いた古くからの謂れのある名石も全国の名園には沢山あります。

私は余り石の種類の名前をよく知りませんが様々な石によって組まれた造形（石組）や石を使った「景物」には興味が惹かれます。

「石組」を取り込み、池の部分強調したものが「池泉庭園」であり、「石組」の部分強調されたものが「枯山水」だと言われています。

「植栽（樹木）」は、庭の中でも当然ながら最も変わり易いものです。時が経つにつれ作庭当初の目論見より必ず成長するし、形も変われば枯れる場合もあります。松や杉、檜や楠などを除けば殆どの樹木の寿命は精々300年程度です。

因みに、旅館や料亭等に設えられた余り陽も射さないような小さな庭や坪庭に植栽されている樹木がいつ観ても同じ高さで葉張りも変わらず緑滴るように生き生きとしているのは、常に剪定されいつも丁寧な手入れがされているばかりでなく、毎年のように新しい同じ樹木を植え替えているからです。

一方、鎌倉時代や室町時代に作庭された日本庭園で、あたかもその時代から存続していたように見える樹木も、いつの時代にか作庭当初の目論見にあったように植え継がれ代が変わっているし、作庭当初とは様相が全く異なるものとなることもあります。

そこで、作庭当初はきつこのようだったのではないか、いやあのようではなかったのかと想像しながら庭の植栽を眺めているといつの間にか時が経ってしまうことがよくあります。

身近な庭園で言えば、六義園にある数本の「タイサンボク」の大木は今ではすっかり庭に溶け込み6月頃、藤代峠から眺めれば真っ白な花がこの池泉庭園に欠かせないものになってしま

いました。ところが、「タイサンボク」は元禄 15 年（1702）に柳沢吉保が六義園を完成した時代から植えられていた樹木のように見えるが、当時は「タイサンボク」はまだ日本には入って来ていませんでした。明治になって六義園が三菱の岩崎家の所有するところになった時に植えられた樹木です。よし悪しは別にして庭の変身です。

「景物」には、様々な物があります。

石灯籠をはじめ敷石（のべだん延段）、飛石、つくばい蹲踞、ちょうずばち手水鉢、垣根、橋、しし鹿おどし（そうず僧都）とこれもあれもときりがありませんし、夫々の種類も数も限りがありません。

例えば石灯籠一つ取り上げても、兼六園にある良く知られたことじ徽軫（琴柱）灯籠もあれば茶庭に多い織部灯籠や池辺にある雪見灯籠もあれば春日大社縁の春日灯籠もあり、形も素材の石も様々です。

色々な形の異なる灯籠を探して眺めるのも、据えられているところの庭の風情を含めて観るのも一層楽しみなところでは

灯籠といえば、桂離宮には様々な形と種類の灯籠が 24 基ありますがおんりんどう園林堂の前に据えられた二対の春日灯籠以外の 22 基はすべてが膝下の高さしかありません。それは、桂離宮が「月の庭」だからです。

月を眺めて楽しむ設えが古書院二の間の前の月見台をはじめ茶亭げっぼろう月波楼等々、桂離宮の苑路の至るところに観られます。視線と同じ高さに灯籠に灯した明かりがあつては月を眺めるのに妨げになるからです。

「橋」は石橋しゃつきょうもあれば土橋もありますし、そりはし反橋、ひらはし平橋、太鼓橋もあります。

「垣根」にも簡単な四つ目垣から建仁寺垣、光悦垣、金闍寺垣、龍安寺垣、沼津垣、柴垣とこれまた上げればきりがありませんし、一部づつを組み合わせた垣もあります。



「一文字手水鉢(青蓮院)」



「鹿おどし(宝殿院)」



「岬灯籠(桂離宮)」



「石橋(旧徳島城表御殿庭園)」



「竹穂垣(桂離宮)」



「沼津垣(旧沼津御用邸)」

庭に据えられている夫々の景物を眺めていると、据えられているところやその妙に感心したり何故ここにあるのか不思議に思ったり、こういう工夫もあるのかと感心したりで興味が深まります。

これまで観たことがない景物に出会うと嬉しくなりいつまでもその場を離れられなくなります。時々、我ながら酔狂な者だと呆れる程です。全国の庭には、まだまだ私の知らない、あるいはまだ観たこともない景物が沢山あるのではないかとこれからも巡り会えるのが楽しみです。



「灯籠の雪覆い(兼六園)」

日本庭園は大きく4つ位に分けられるのではないかと思います。

栗林公園(高松市)や浜離宮恩賜庭園のような園遊会の場として使われた大名庭園に多い「池泉回遊式庭園」と、大徳寺の塔頭の一つ大仙院や龍安寺の石庭のような枯山水庭園と、一般には観られません。市中山居を表現した不審庵(表千家)や又隠(裏千家)のような「茶庭」と、龍源院(大徳寺塔頭の一つ)の東滴壺や建仁寺の潮音庭のような「坪庭」です。

夫々の特徴に照らして庭を観るのも楽しいものですし、古くは天龍寺庭園や西芳寺庭園を作庭した夢窓国師や二条城庭園や頼久寺(岡山県高梁市)の小堀遠州や常栄寺(山口市)の雪舟や明治以降では無鄰庵や平安神宮神苑の7代目植治(小川治兵衛)等のいわゆるブランド庭師が作庭した庭を巡り眺めるのは流石に味わい深いものがありますが、著名な庭師が作庭した庭園でなくても思わぬところに「侘び」や「寂び」を感じられる素晴らしい庭の発見があり嬉しくなります。



「藁ボッチ(六義園)」

これからも新しい発見と庭の情緒を楽しみに各地の庭巡りを続けて行きたいと思っているところです。